

群 教 セ	G09 - 03
	平 28. 261 集
	英語 - 高

リーディング・リテラシーを育成する コミュニケーション英語Ⅲの指導

—インプット→インテイク→アウトプットの流れを意識した
授業づくりを通して—

特別研修員 石井 千裕

I 研究テーマ設定の理由

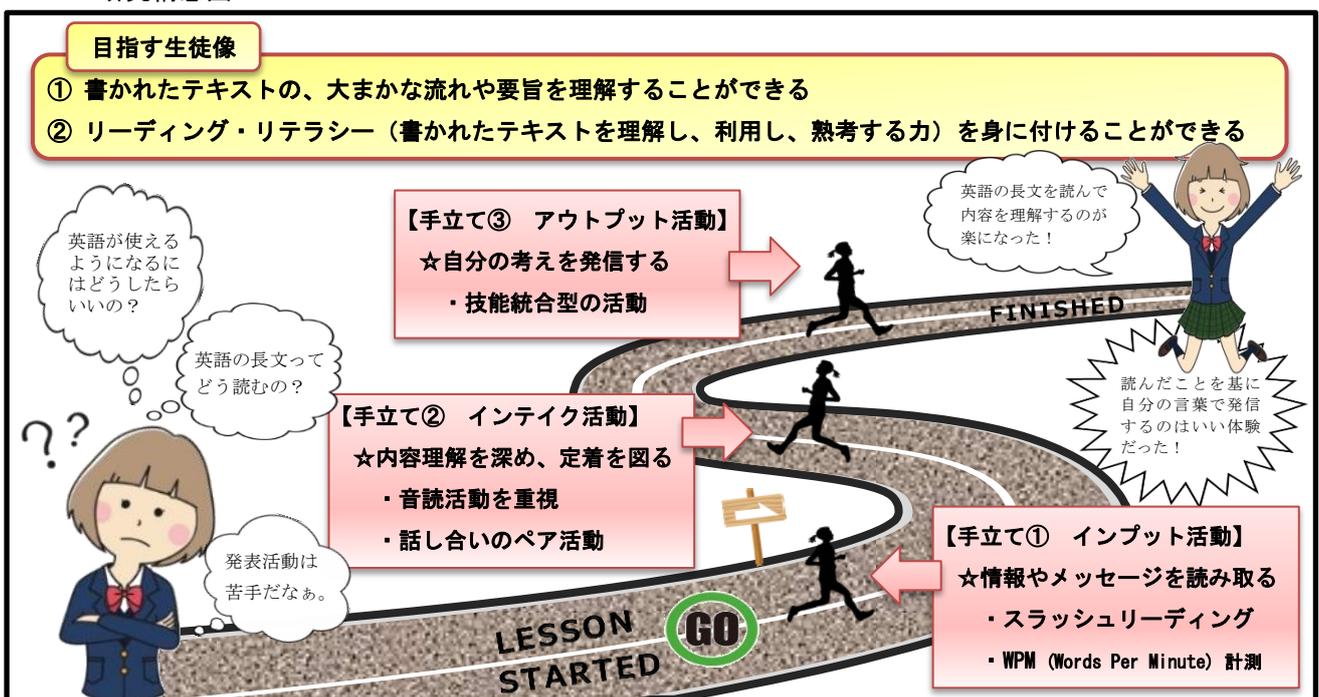
経済協力開発機構(OECD)が実施する「生徒の学習到達度調査(PISA)」(2015)の結果、日本は「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」が参加国中上位であるのに対し、「読解力」の分野では順位を大きく下げていることが明らかになった。日本の高校生は自分の意見を述べたり、テキストの中の情報を抽出したり、記述する形式の自由記述式の出題に慣れていないために無回答率が高かった。PISAの最終目標は課題解決であり、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する力(リーディング・リテラシー)」を向上させることが必要であるとしている。

文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、高等学校の英語教育において、幅広い話題について抽象的な内容を理解でき、ある程度流暢にやりとりができる能力を養うために、授業中の言語活動を高度化すること(発表、討論、交渉等)が目標とされている。また、高等学校学習指導要領におけるコミュニケーション英語Ⅲの目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする」である。

多くの生徒が「読む」活動に対して苦手意識をもっている一方で、「長文を読む時に大切だと思うことは何か」という質問に対して「話の大まかな流れや要旨を捉える」「まとまりを意識する」と回答するなど、読解に必要なことについての意識が高いことが認められる。多様な英語長文を読み込むことは、現在の社会が抱える課題である「話す」「書く」といったアウトプットの土台づくりとなる。リーディング・リテラシーを身に付けることは、国際社会の中で生きていくために必要なことと考え、テーマとして設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

リーディング・リテラシーの育成を目指すために、1時間の授業の中で以下の手立てを全て行う。

手立て1：インプット活動

情報やメッセージを読み取るための活動として、スラッシュリーディングの活用と、WPM(Words Per Minute)の測定を行う。スラッシュリーディングの活用では、1語1語のもつ意味に集中するよりも、前後関係から意味を推測し、意味のまとまりを意識した読解を心がけさせる。また、言語を理解し記憶するためには、最低限のスピードが必要である。WPMの測定により、スピードを意識したリーディング活動を通して、文章や資料から情報を取り出したり、筆者の意図を解釈したりすることができるようになることに気付かせたい。また、WPMの測定値が向上していく成功体験を、生徒の英語学習へのモチベーション向上につなげたい。

手立て2：インテイク活動

内容理解を深め定着を図るために、音読活動を重視し、ペア活動の充実を図る。音読活動では、単語の発音、リズムやイントネーションなど音声的な特徴を捉えて適切に音読する。その後のアウトプット活動を意識させ、重要な英文構造や正しい発音の定着を図る。また、話し合いなどのペア活動を多く取り入れることで、自分自身の考えを適切に伝えることができるようになる。さらに、他者との意見交換を通じて、自分とは異なる視点や考え方を知ることができ、理解の深まりにつなげる。

手立て3：アウトプット活動

自分の考えを発信するために、技能統合型の活動を本文の内容理解後に行う。内容に関するQ&A活動や、サマリーライティング、更には自分の知識や経験と関連付けて建設的に批判したりするような読み(クリティカル・リーディング)の充実を図る。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- リーディング・リテラシーの育成を目指し、インプット→インテイク→アウトプットという一連の流れを意識した授業を行った。与えられた英文から情報を読み取り(インプット活動)、ペアによる情報交換(インテイク活動)を行い、生徒は自分なりの英文解釈を深めることができた。また、理解した英文の習熟を目指し音読練習(インテイク活動)を重ねた後でアウトプット活動を行い、知識を活用しながら情報を適切に発信することができた。この1時間の授業の流れ(インプット→インテイク→アウトプット)を大切にすることが、生徒の脳の活性化に少なからず影響し、自分自身の知識や考え、経験等と結びつけて発信することを可能にしたと言える。
- 単語を一語ずつ追いかけるのではなく、意味のかたまりで捉えるスラッシュリーディングをインプット活動へ導入した結果、生徒は読みのスピード向上を実感することができた。また、前後関係から意味を推測したり、意味のまとまりで捉えたりすることの大切さに気づき、長い英文を読むことへの苦手意識の克服につながった。本校で行っている校外模試の結果では、長文読解(リーディング)の力の向上が結果に表れている生徒もおり、一定の効果が見られた。
- 内容理解後の音読活動では、「この音読練習をきちんとやっておけば、後の活動で役に立つ」という感覚をもつことができたのか、積極的に取り組む生徒の姿が多く見られた。語句レベルの理解から一文の中でのつながりにも目を向けさせて、理解した内容と音声化された情報とのマッチングを行うことで内容理解が深まった。

2 課題

- アウトプット活動の充実を図る必要がある。即興性を必要とするものやサマリーライティング活動などではまだまだ生徒の苦手意識が強い。まとまりのある英文を書いたりする活動を取り入れる必要がある。また、生徒が「自分のこと」として感じられるようなコミュニケーション活動のテーマ設定を行い、生徒の実態に沿ったアウトプット活動の工夫をしていきたい。

＜授業実践＞

実践例

1 単元（題材）名 「Lesson 6 Communication without Words」（第3学年・2学期）

2 本単元（題材）について

本題材は、言葉以外の手段を用いたメッセージのやりとりについて取り扱う。その非言語コミュニケーションの一例であるボディーランゲージや、文化圏によってボディーランゲージの類似性がある場合と全くない場合、あるいは別の意味にとられるなどの地域性も存在することについて書かれた英文を読み進めていく。本題材を読み進めていくことを通して、生徒は異文化理解を深めるとともに、学んだことを発表し合ったり、内容をまとめ合ったりすることができる。このことは、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成や既習知識をその後の社会生活に活用するなどのリーディング・リテラシーを育成することにつながり、本題材を学習する価値は大きい。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ボディーランゲージについて大まかに理解したことを基に、様々な発表活動を行う。	
評価規準	関心・意欲・態度	様々な種類のボディーランゲージに関して積極的に学び、また知っている知識について発言しようとする。
	表現	ボディーランゲージの様々な種類や、文化による違いについて簡潔に話すことができる。
	理解	本文全体の構成・パラグラフの内容を大まかに理解し、ボディーランゲージを学ぶことの大切さを理解する。
	言語や文化についての知識・理解	他文化のボディーランゲージに関する知識をもつことが、幅広いコミュニケーションにつながることを理解する。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時	・日常生活の中で、自分自身がどのような非言語コミュニケーションを行っているのか考えるとともに、他文化のボディーランゲージについて学ぶ。
課題追究	第2～5時	・各段落（第1段落～第6段落）の英文を速読し、その内容を大まかに理解する。 ・各パラグラフの内容を要約したり、それに対する感想や意見を伝え合ったりする活動を取り入れる。
まとめ	第6時	・他文化のボディーランゲージに関する発展的な内容の長文読解に挑戦したり、本題材のまとめとして要約文を作成したりすることで、既習知識の活用をする。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第3時に当たる。授業では、インプット活動→インテイク活動→アウトプット活動の流れを意識した授業を展開するため、以下のように手立てを具体化した。

手立て1：インプット活動

スピードを意識した読解をさせるため、WPM(Words Per Minute)の測定を行う（2回）。2回目を測定することにより、生徒が学習した内容を振り返りながら再度読み進めることができる。また、読解の際にはスラッシュを入れながら読み進めることで、意味のまとまりも意識しながら取り組ませる。

手立て2：インテイク活動

本文の内容の定着を図るため、ペアで確認させ話し合わせることにより内容理解を深めさせる。また音読活動を重視し、正しい発音や英文構造の定着を図ることで、その後のアウトプット活動を意識させる。音読活動では、スクリーン上に映された英文を穴埋め形式にしたりするなど、視覚的な工夫も行う。

手立て3：アウトプット活動

読み取った内容を基に「生徒自身が日常生活で使用しているボディーランゲージを英語で紹介する」発表活動を行う。発表活動をスムーズに行うために、教師によるデモンストレーションや、ペアでの練習時間などを設ける。生徒が本題材を「他人事」ではなく「自分のこと」として身近に感じられるようにする。

4 授業の実際

インプット活動としてのスラッシュリーディングやWPMの測定を通して、生徒がスピードを意識し、内容を大まかに理解できるように配慮した。WPMの測定では、大きめのタイマーを用意し、生徒全員が時間を確認できるようにした(図1)。生徒は、スピードを意識した読解に取り組むことを通して、自分自身の読むスピードを知ることができた。また、毎回算出するWPMの数値をより良くしたいという積極的な態度が随所に見られた。スラッシュリーディングを活用した本文解説では、本文をフレーズごとにプロジェクタを用いて黒板に映し出すことによって、生徒の視線を一箇所に集め、教師が今何を説明しているのかが一目で分かるようにした(図2)。生徒は、意味のまとまりごとに区切って英文を理解していくことで、長い一文も大まかに読み取ることができるようになり、本文の内容について要旨を捉えることができた。教師からの一方的な説明に終始せず、本文の内容に関してペアで考えさせたりすることで、生徒が受け身になることなく授業に参加していた。



図1 WPMの測定を実施



図2 フレーズごとの本文解説

インテイク活動としての音読練習は、スラッシュリーディングによる内容解説後すぐに取り入れた。理解した内容と、音読練習を通して音声化された入力情報が、能率良くマッチングすることにつながり、正しい発音や英文構造の定着を図ることができた。その際、その後のアウトプット活動で必要となるフレーズや重要語句をスクリーン上で空欄にしたり、黒板を活用し強調したりするなど、視覚的にも工夫を行ったことで(図3)、生徒が緊張感やスピード感をもって取り組むことができた。また、ペア活動では、教師による発問や内容理解後の確認作業として、ペア同士でお互いの解釈や疑問点などを自由に伝え合い、内容理解を深めていた(図4)。

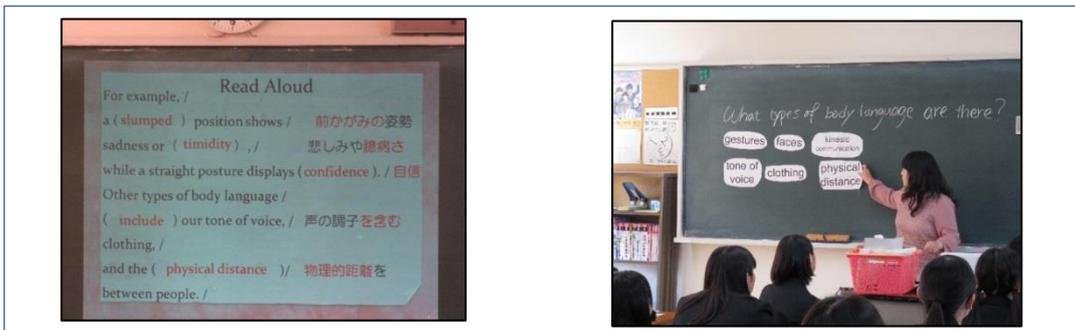


図3 視聴覚的な工夫(スクリーンや黒板を活用)

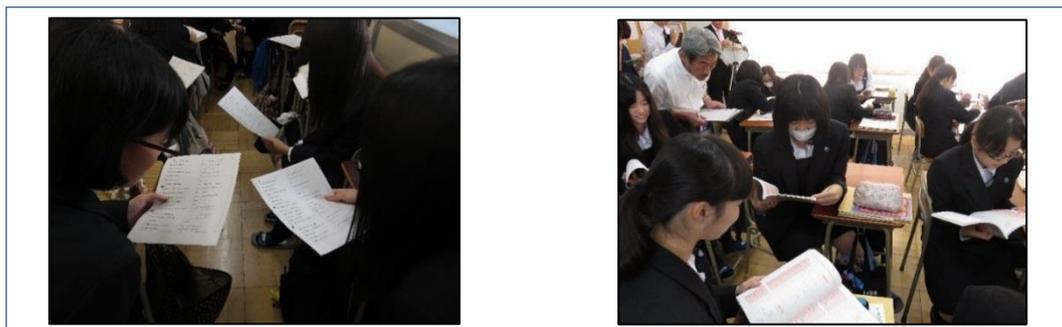


図4 ペア活動による内容理解

インプット活動→インテイク活動の流れを受けて行ったアウトプット活動では、本文の内容で取り上げられていたボディランゲージにはどんな種類があったのか、その復習を最初にスライドを使って行い、生徒はインプット活動及びインテイク活動で学んだ内容を確認することができた。その後、次は生徒たち自身が普段使っているボディランゲージを紹介し合うことを伝えた。その際、発表活動をどのように行っていくのか生徒に見通しをもたせるため、まずは教師によるデモンストレーションを行うことで、生徒が安心して発表活動に臨むことができるよう配慮した(図5)。

配布されたワークシートに発表原稿を作成する際には、これまでの授業の中で学んだ表現や本文内容を活用することや、自分一人だけで考えるのではなく、周囲の生徒同士で協力し合ったり助け合ったりするよう伝え、生徒はお互いに意見を出し合いながら準備を進めていた。また生徒のつまづきに応じて教員による支援を行うなど、安心して発表活動に移れるよう配慮したことで、全員の生徒が発表原稿を作成することができた。実際の発表活動では、ペアによるリハーサル練習(図6)を行った後、全体での発表を実施し、全員で共有した。



図5 教師によるデモンストレーション



図6 ペアによる発表のリハーサル練習

5 考察

インプット活動として、題材を読み取るために活用したスラッシュリーディングやWPM測定は、比較的長い英文を読む際にはとても効果的だったと思われる。特に、スラッシュリーディングの手法は、生徒への事前アンケートで、「英文を読むことは英文の和訳をすることである」と考えている生徒が数名いたため、意味のまとまりを意識し、英語の語順のまま理解することの大切さに気付かせるために授業で取り入れたものである。生徒は、スラッシュリーディングの手法を用いたことで、意味のまとまりを意識することの大切さに気付くことができた。授業後のアンケートには、「内容理解がしやすくなった」「長文を読むことが少し楽になった」との意見が多かったことから明らかである。WPMを授業で活用したことに対しては、生徒からの意見として「数値が自分の成長を表してくれるのでやりがいがある」「自分のペースをつかむことができた」「もっと速く読めるようになりたい」などの肯定的な意見がほとんどであり、生徒の意欲の高まりが確認できた。

インプット活動→インテイク活動→アウトプット活動の流れを意識した1時間の授業づくりを通して、それぞれの活動が必ず意味をもち、関連性のもった活動になるよう工夫した。このことにより、生徒は見通しをもって1時間の授業に落ち着いて取り組むことができただけでなく、頑張れば後で必ず役に立つということが分かると、どの活動に対しても積極的に取り組むなど、生徒の学習意欲向上につながったようであった。

アウトプット活動では、リーディングで読み取った内容をもとに、「普段使用しているボディランゲージを英語で紹介する」活動を行ったが、この活動をすることにより、読み取った本文の内容が他人事ではなく、「自分のこと」として身近な話題に捉え直すことができたことも、リーディング・リテラシーを育成することを目的とした授業の工夫として効果的だったと思われる。今後も、生徒の言語活動を活性化することができ、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、一人でも多くの生徒が英文を読んだり解釈したりすることが楽しいと感じ、読んだことをその後の生活の中で活用していくことができる力を身に付けられるような学習支援や授業づくりを行っていきたい。